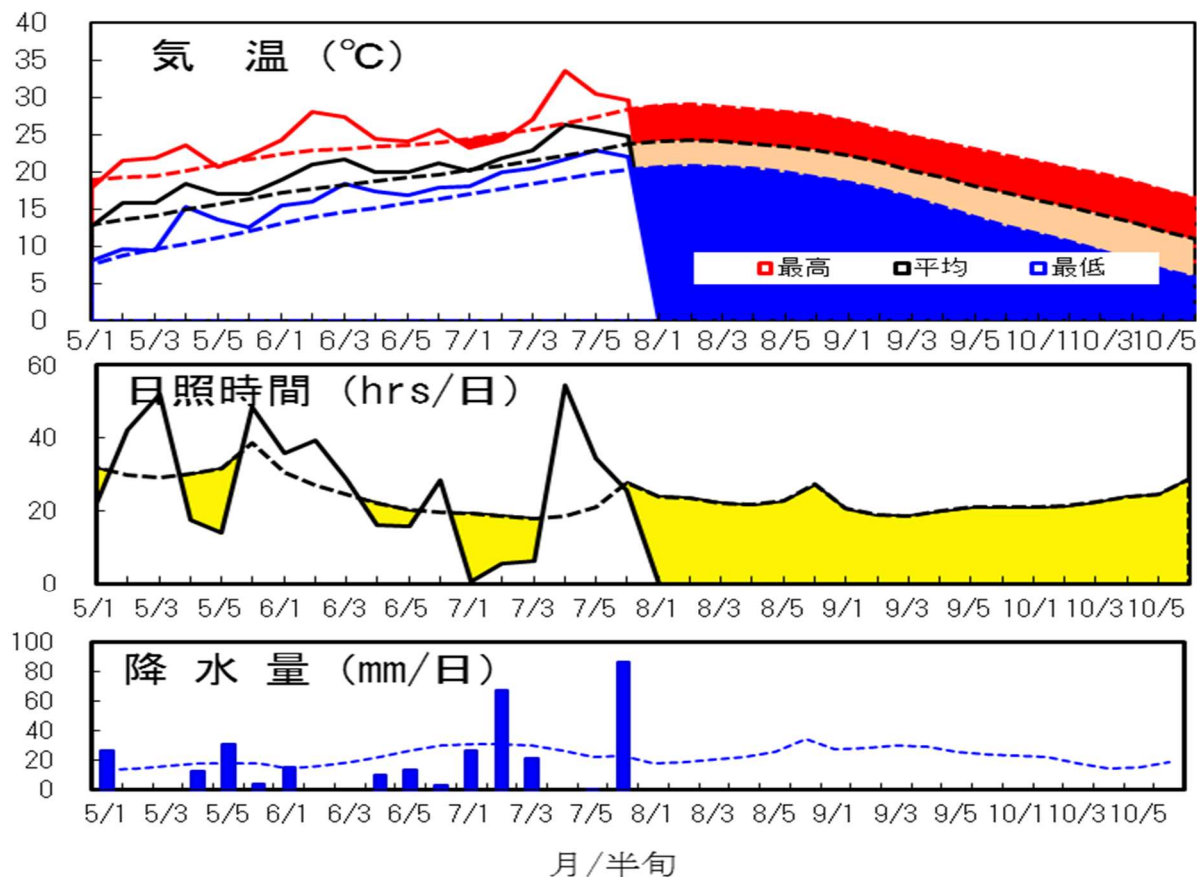


～7月中旬の高温・多照で生育回復 排水・追肥・防除対策を～

1 気象経過



- ・7月上旬は、平均気温は平年並みとなったが、降水量は平年を大きく上回り、著しい寡照となった。7月中旬は、高温、多照、少雨となった。

◆東北地方の1か月予報(7月31日～8月30日までの天候見通し)

- ・東北太平洋側は天気は数日の周期で変わるが、平年に比べ晴れの日が多い。期間の前半は気温がかなり高くなる見込み。
- ・気温は、高い確率70%、平年並みの確率20%、低い確率10%。
- ・降水量は、多い確率20%、平年並み若しくは少ない確率40%。
- ・日照時間は、多い若しくは平年並みの確率40%、少ない確率20%。

〈向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)〉

【気温】東北地方	10	20	70
【降水量】東北太平洋側	40	40	20
【日照時間】東北太平洋側	20	40	40

2 生育状況

【宮城県古川農業試験場 作況試験より】

① 5月25日播種(タンレイ・ミヤギシロメ)

- ・主茎長は平年並み～やや短いですが、7月中旬の高温により主茎節数及び分枝数は平年よりやや多くなっている。総節数も平年並み～やや多くなっている。

・開花期は、高温傾向で推移したため「タンレイ」で平年より4日早くなっている。

② 6月15日播種（ミヤギシロメ）

・主茎長は40cm、主茎節数は10.2節、分枝数は2.1本、総節数は17節となっている。

③ 7月2日播種（タンレイ）

・7月中旬の高温により、主茎長、主茎節数及び総節数は平年を上回っている。

◆前回（7月5日）調査時は、寡照等の影響で生育量は不足気味であったが、中旬以降の高温により、生育量は概ね平年並みに回復した。

生育調査結果（7月26日調査）

播種期	品種名	開花期（月/日）			主茎長(cm)		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	7/21	2日早い	4日早い	62	-9	-5
播種	ミヤギシロメ	-	-	-	72	-5	2
6/15播種	ミヤギシロメ	-	-	-	40	-	-
7/2播種	タンレイ	-	-	-	26	7	8

播種期	品種名	主茎節数（節/本）			分枝数（本/本）			総節数（節/本）		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	15.1	0.9	0.9	4.0	1.1	0.9	32.0	3.0	2.0
播種	ミヤギシロメ	14.8	0.6	0.6	3.3	0.4	0.3	28.0	1.0	-1.0
6/15播種	ミヤギシロメ	10.2	-	-	2.1	-	-	17.0	-	-
7/2播種	タンレイ	6.0	2.1	1.5	0.0	0.0	0.0	6.0	2.3	1.7

（5/25播種 タンレイ）



（5/25播種 ミヤギシロメ）



（7/2播種 タンレイ）



3 今後の管理

1 排水対策と追肥

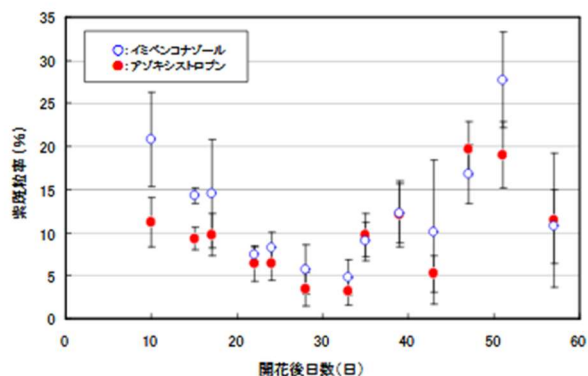
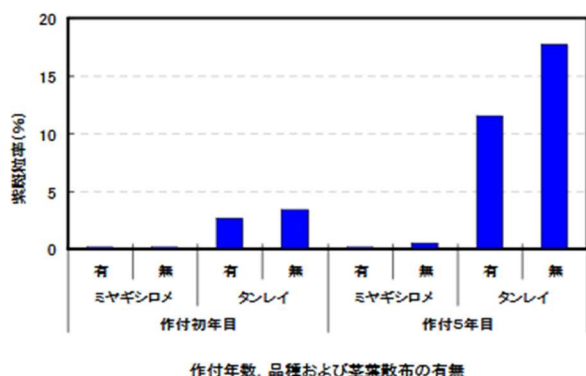
- ・排水対策の重要な時期は、①播種直後の発芽期、②根粒着生から開花前までの生育前期、③子実が肥大する生育後期である。
- ・生育後期は、湿害により未熟粒や障害粒が発生するので、登熟を良好にするために排水対策が重要となる。
- ・湿害の影響を受け、生育量が不足しているほ場では、窒素追肥が有効である。追肥の前にほ場の停滞水を排除し、速効性肥料を3kg/10a程度施用する。

2 病虫害防除

（1）紫斑病

- ・本病による紫斑粒の発生は、品質低下の一因となっている。
- ・本病に対する抵抗性には品種間差異があり、ミヤギシロメやタチナガハは「強」、タンレイは「中」である。また、大豆を連作すると本病の発生リスクは増加する。

- ・ **薬剤防除**の散布適期幅は、大豆の開花後日数で20～40日程度である（下右図参照）。開花期は、ほぼ7月下旬なので、**散布適期は8月下旬頃**を目安とする。



【宮城県「普及に移す技術」第84号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】

(2) ウコンノメイガ

- ・ 幼虫が大豆の葉をロール状に巻き、その中で葉を食害する。発生量が多いと子実の小粒化及び減収をもたらす。
- ・ 本種の「要防除水準」を下記に示す。8月に入って間もなく大豆1本当たりの「葉巻数」を数え、1. 3個以上あれば防除を検討する。
- ・ **防除適期**は「中齢幼虫」の初発時期と考えられており、「**8月上旬**」が適期である。
- ・ 「クロラントラニリプロール水和剤」及び「テトラニリプロール水和剤」は、本種に対して高い防除効果がある【宮城県「普及に移す技術」第88, 90, 94, 95号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】。

表1 大豆におけるウコンノメイガの要防除水準

減収率 (%)	要防除水準	
	葉巻率 (%)	1本当たりの葉巻数 (個)
5	1.6	1.3
10	5.2	2.9
15	8.5	4.7
20	11.6	6.7

注1) 葉巻率、葉巻数は加害初期の8月第1半旬に数える。

注2) 要防除水準の値は図2の回帰式の95%信頼限界より求めた。



【病害虫防除所 HP より】

(3) マメシクイガ

- ・ 幼虫が莢の中に侵入して、子実を食害する（下写真参照 病害虫防除所HPより）。
- ・ 大豆を4年以上連作すると、被害が大幅に増加する（下右図参照）。
- ・ **防除適期**は、「成虫」の発生盛期～その10日後である「**8月第6半旬～9月第1半旬**」頃である。
- ・ 「シペルメトリン乳剤」、「フルキサメタミド乳剤」及び「クロラントラニリプロール水和剤」は、本種に対して高い防除効果がある【宮城県「普及に移す技術」第84, 94号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】。

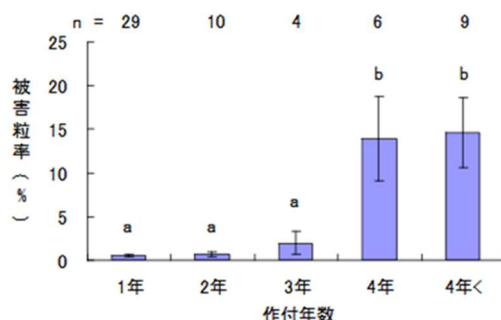


図4 ダイズ作付年数とマメシクイガの被害粒率
同じ添字は、5%レベルで有意差がないことを示す(Tukey-Kramer法)。
図中の縦棒は、標準誤差を表す。

(4) タバコガ類（オオタバコガ、ツメクサガ）

- ・近年、タバコガ類の幼虫が突発的に多発し、葉や莢を加害する事例が見られる。特にオオタバコガは、大豆以外にもナス、キャベツ、トルコギキョウ等の作物も食害する広食性害虫である。
- ・若齢幼虫は大豆の未展開葉を食害し、中老齢幼虫になると莢も食害する（下写真参照）。
- ・幼虫の発生密度は開花始期頃にピークを迎え、ピーク時の発生密度は「大豆の播種時期が遅い」ほど高い。また、品種別では「タンレイ」より「ミヤギシロメ」で高い【宮城県「普及に移す技術」第94号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】。

◆「フルキサメタミド乳剤」は、オオタバコガ、ウコンノメイガ及びフタスジヒメハムシに対して高い防除効果がある【宮城県「普及に移す技術」第95号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】。

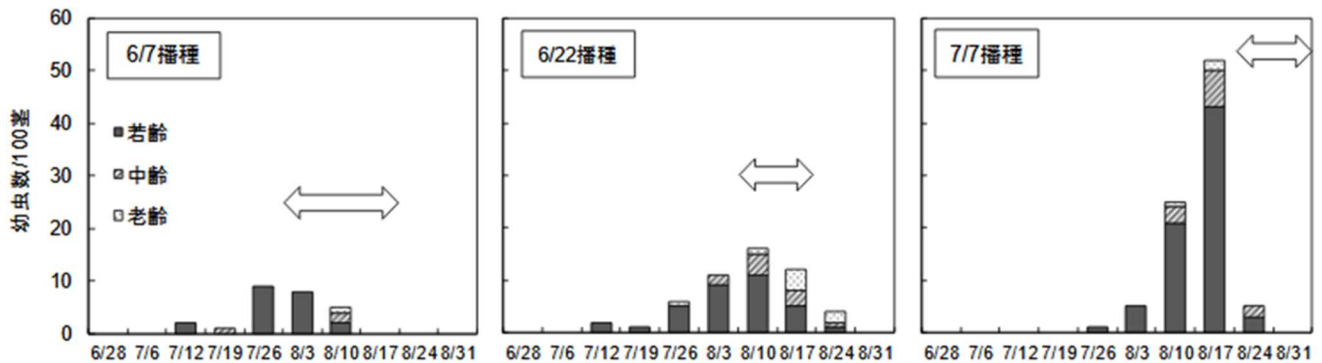


図1. 播種時期が異なるダイズにおけるタバコガ類幼虫の発生消長（平成29年度）

注1）図中の矢印は、開花始～終期を示す。

注2）「ミヤギシロメ」における調査結果である。

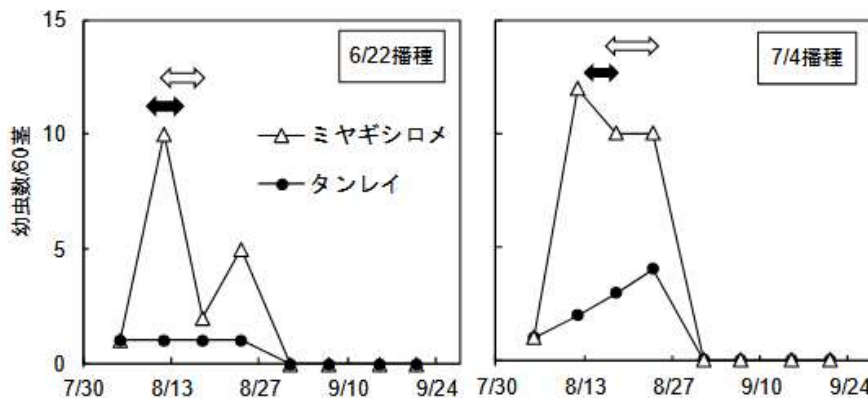


図2. 「タンレイ」及び「ミヤギシロメ」におけるタバコガ類幼虫の発生消長（平成28年度）

注1）図中の矢印は、開花始～終期を示す。

注2）「タンレイ」は中生品種、「ミヤギシロメ」は晩生品種である。



図3. タバコガ類によるダイズの被害葉（左）と被害莢（右）